

# AsiaWave

 vol.170

2

韓国写真館  
金丸知好  
仁川

4

特集

インドのダリットの  
民族芸能と  
社会変革

黒川妙子

9

エッセイ

日本が  
沈む日

はとうゆきお

12

Life&Culture

ラフマン・愛

レスンでサンバル作り

桂川唯香

パタヤーに溢れるカップルたち

孫秀萍

またも中国製

中国タクヤ

書評「物語タイの歴史

—微笑みの国の真実—

亞洲奈みつほ

映画「僕は君のために蝶になる」



(はとうゆきお撮影)

## 人々の声

はとうゆきお

インターネットで見ると、北ラオスのムアンシンの山地民、アカ、ヤオ、タイナムなどが、やたら物議をかもしだしていますね。「敵意に満ちた眼差し」を向けられたとか、「この人たちは獣だ。決して馴れない獣」とか、さんざん言われようです。

でも、本当にそうでしょうか？ 私には、なんか旅行者がカンチガイしているだけのような気がしてならないのです。

日本の漁村のような、すべての人が顔見知りという集落に、とっぜん見知らぬ人間が現れたらどうでしょうか。もうその人は、そこにいるだけで不審者ですよ。旅行者とは、つまりそういう存在なのです。

土地の人が旅行者を歓迎してくれるのは、ひとえにカネを落としてくれるから。村を訪れて何も買わない旅行者は、たんなる目ざわり。「観光地にわらわら来るとしてカネを落とさないヤツは、たんなる人ごみのゴミ！」なんですよ。

「すぐに土産物売りつけにくる。それも愚にもつかないつまらない品物を」と、書いている人もいました。でもね、モノを売りにくるのは、商売熱心だからですよ。品物がちゃちいのは、立派なものは町の業者に売ってしまうからです。

「あんたは不審者、招かれざる客。何の用事があったてここへ来たの？」そういう無言の聲が聞こえてきませんか。

金丸知好の  
韓国写真館  
仁川



ソウル市内から地下鉄1号線に乗ると、まもなく地上に出る。  
 電車で揺られること一時間ちょっと、仁川駅で降りると潮のにおいが鼻をくすぐる。  
 そう、仁川は釜山に次ぐ韓国第二の貿易港である。  
 また二一世紀になって国際空港が開港し、韓国の空の玄関口としての顔を持つ。  
 港町ということであって美味しく刺身店が軒を並べている。  
 平日だというのに、午前中から焼酎片手に舌鼓を打つ人々がいっぱいだ。



仁川駅前には韓国唯一のチャイナタウンが広がる。  
 仁川港が1883年に開港して以来、対岸の中国から貿易商が居住し、できた町だ。  
 1万人の中国人が暮らした町も、朝鮮戦争と東西冷戦の影響ですっかり廃れてしまった。  
 しかし、20世紀末に中国との関係が修復し、チャイナタウンも復興し始めた。  
 中国に向かうフェリーが毎日のように出港する仁川。  
 釜山から始まった韓国縦断の旅も、中国行きの船に乗ったことで終わった。



# インドのダリットの 民族芸能と社会変革

## 黒川妙子

れたインドの被差別カーストの人々が自身を呼ぶ名称で、ふみつけられ破壊された者の意味がある。そしてアンベードカル博士は、近代におけるダリットの代表的な指導者である。

1999年8月のある日、私は長距離バスをのりついで、南インド・タミルナードゥ州北部の町、ヴェルール市から約20キロほど行ったところにある、農民教育開発協会(Association of Rural People's Education and Development ARPED)にたどりついた。インドの民衆芸能を実際に見たいといろいろ調べてみたものの、広大なインドのどこから手をつけたらよいやら途方にくれていた私が始めたのが、伝統民衆芸能を積極的に社会変革活動に用いるグループを、各地に訪ねていくことだった。そしてまず行き着いたのが、このARPEDという小さなNGOだったのである。

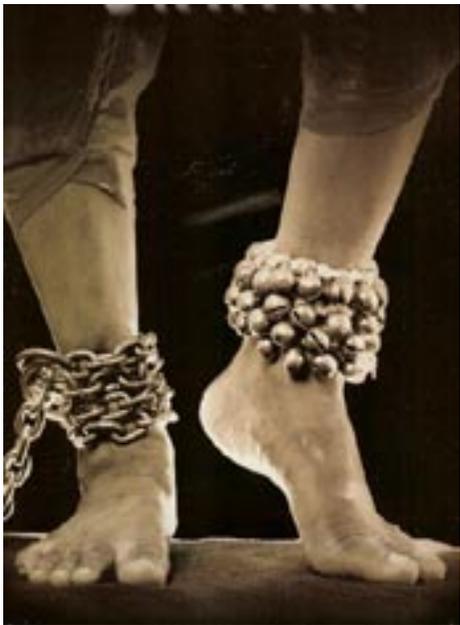
インド全体でダリットの人口は1億6千万人以上にのぼり、実にインド全人口の15%以上をしめるのである。少数ではない、人口の大きな割合をしめる彼らは、他のカーストの人々が使う共同井戸から水をくむこともゆるされず、また少しでも創意工夫や努力をして社会的に上昇する機会を得ようとすれば、すぐにつぶされある時には虫けらのように殺されてしまう。喫茶店では、ダリットの人々には、一般とはちがうカップでしかお茶を売ってもらえない。上位カーストの人がダリットの人々とおなじカップを使うことを、よしとはしないのである。

ARPEDで予期せぬ光景にでくわし、私は民衆芸能を見に来たのであるのに、これは関係ないところまでしまったのかと不安になった。すぐにARPED代表のプラブウ氏がスタッフを招集し、その晩にダリットの村で披露する演目のリハーサルを見せてくれた。このARPEDはダリットの解放運動を底辺で支えるべく、村人の意識化や啓蒙活動の手段としてタミル民謡をうたい、民俗舞踊や身近な社会問題をテーマにした短いお芝居を上演しているのであった。

しかし事務所の建物の外壁には英文で「ダリット・リソースセンター」(Dalit Resource Centre)の文字があり、入口にはダリット解放運動の象徴的な存在であるアンベードカル博士(Dr. Dhirmrao Ranji Ambedkar 1891-1956)の像がたっている。ダリットとは、不可触民とさ



シスター・チャンドラ



足にはめられた鎖と鈴—シャクティの象徴

シャクティのおどり手たちがおどる際に、足首につける鈴がある。インドのおどりには、この足の鈴が欠かせない。し

心に傷をうけ、また貧しさから社会の隅で生きることを余儀なくされてきた少女たちが、自らを癒し、社会を知り、他の人々の先頭になつてリードしていくまでになるために、シスター・チャンドラが作る歌やおどりが、少女たちの成長の糧となるのである。これにより彼女たちは自尊心をとりもどし、意識を変革させ、内面から輝く人間となつていく。

リハーサルが佳境に入ったところ、スタッフの一人ラヴィチャンドラン氏が、タンバリンのように片面だけに皮がはらわれている太鼓を手にもつて登場した。「ドーン、ドーン、ドーン、タカタカタカタカ……」とその太鼓が鳴り響くと、あたりはしんと静まった。どの人もこの太鼓の響きに全身がひきつけられるようであった。プラブ氏は、このタッピーとよばれるダリットの太鼓は、ダリットの人々の苦しみと喜びがもつとも凝縮されている太鼓なのだを教えてくれた。これはある人々にとってはすさまじい差別を象徴する死の太鼓でもあり、ある人々にとってはダリットの人々の命と喜びがこめられている生の太鼓でもある。この太鼓を自分たちが誇るダリット文化としてとらえなおし、自らの価値の回復と差別からの解放を果たそうとしていることがひしひしと伝わってきた。

私は当初「場違いなところにきてしまったのではないか」という思いがあったが、リハーサルを見てすぐにそうした思いは消え去つていった。そればかりか、来るべきところに私は来たのだという思いを強くしていた。私の関心事である民俗芸能の多くは、このダリットの人々をはじめ、主に社会の最下層の人々によつて担われていることを知つたからだった。さらにこのタッピー演奏が、タッピー舞踊として新たな展開をとげ、おどろくことに現在ではタミルナードウ州を代表する民俗芸能として、社会の広い範囲にひろがっていることを知つたのである。

創立者のシスター・チャンドラは、社会の底辺にいる人々に奉仕をしたいがために、カトリックの修道女となつた人である。シスター・チャンドラ自身も、炎天下の農作業の合間に、水をのもうと手をのばしたら、ひっぱたかれたという経験をもつ。ひっぱたいた人は、シスター・チャンドラをダリット女性の一人だと思つていたので、ダリットが水を飲むとは言語同断としたのだつた。

このシスターチャンドラは、歌やおどりについての深い造詣を有し、歌やおどりの力が、それまでは自信もなくひ弱な少女たちを、自分をみつめ社会の矛盾を知り、徐々に自信にみちた立派な人間に育てあげ、社会に尽くす人材とさせることができることを、はっきりと示してきた。他人の苦しい状況、喜びをうたうのではなく、自らの人生を重ね合わせながら、少女たちはうたい、おどるのである。そしてその姿はいわゆる声高に権利を主張するのではないが、差別の不当性を強く人々にうたえる力をもつている。シャクティで訓練される少女たちは、ヒンドゥ教徒もいれば、基督教徒もいる。また少数だがイスラム教徒もいる。シャクティでは異宗教の少女たちが共につどい、地域につくす人材となるべく切磋琢磨している。



かしの鈴は古典舞踊をおどる時に用いられるような、軽やかな音を響かせる鈴とはちがう。この鈴は、通常は家畜につけられる重い鈴なのである。これをあえて選び足につけることで、彼らが表現する内容や方向性は、大地や民衆に根ざしたものであることをさらに印象づけている。

声をあげることさえ許されずにいる女性たちの支えとなるために、もともとは男性のみがたたいていたタッピー太鼓を彼女たち独自の方法でとりあげ、シャクティは「女たちのタッピー舞踊」をおどる。その中には女性のおかれた現実を如実にしめす、演劇的なシーンが登場するので、それを一部紹介したい。

《少女Aのセリフ》  
普通は男だってタッピーなんてたきやしないのに、どうしてあなたたち女たちがたたいているの？

《シャクティメンバーのセリフ》  
どうしてかって？

女たちがタッピーを手にして、これをたたくには理由があるんだ。

その理由を教えてあげようか……

《うた》

お母さんの子宮に存在したその瞬間から

女たちの闘いは始まる

お母さんのお乳すら

女の子たちには与えられない

お乳すら与えられず

生きたいという意志があっても

その命さえ否定される

嫁ぎ先では

女たちの生活は

さらに日々が闘いの連続である

私の愛する子よ

あなたが生きるために

あなたの権利を闘おうとした時に、

彼らはあなたに何をしでかしたのか

あなたを焼き殺した

女の赤ちゃんだったという

たったそれだけの理由のために

お母さんの子宮にいる時から女性として成長してからも社会的な性的虐待を受け続ける

あなたは無邪気な学校に通う女の子だった私のかわいい子よ

学校に行く道の途中で彼らはあなたを襲いおかした

配給所で毎日あういやがらせ

生活必需品の値上がり

飲み水を確保するための闘い

あなたはただ

基本的な権利を声にただけなのに

あなたを路上で殺し埋めた

男女平等をうたうこの民主主義国家では

労働の賃金も男女ではおおく差をつけられる

正当な賃金をもらうための

農民たちの闘い

奴隷のように働き

そしてみな共に闘った

賃金をあげると頼むと

彼らはあなたをなぐり

死にいたらしめた

これが基本的権利さえも失っている

女たちの姿だ

私たちはそれにたちむかう

もし椰子の木が倒れば  
豚でさえもそれをとびこえるではないか

何世代も何世代にもわたって  
カーストの名において  
宗教の名において

私たちは搾取され、利用されてきた

そして何の権利もない裸のまま  
立ちつくしてきた

これが正しいといえるのか  
教えて！  
教えて！  
教えて！

このタッピーはもはや  
死を知らせる太鼓ではない

わたしたち自身がふみつけられ  
死にいたらしめられていることを  
告発する

その告発のタッピーである

私たちの権利のためにたたかう  
まっすぐに頭をあげ  
たちあがるために  
このタッピーをたたく

私たちの心の声をたたこう

このタッピーに私たちの叫びをのせよう

わたしたちのタッピー



シャクティのメンバーたちは、請われればどこへも楽器を片手にでかけていき、彼らのこうした歌やおどりを披露して、人々の意識の喚起をはかる。しかし普段は60以上の村にスタッフが出向いて、村人の相談ののつたり、子ども達の教育活動や村の問題解決などに、尽力するソーシャルワーカーとなって活動しているのである。

シャクティのメンバーとして活動している時には、彼女たちは自信に満ちて表現をしている。しかしシャクティを離れ、実際にそれぞれ結婚をし子どもを育て生活するなかで、彼女たちに対する差別や苦勞が解消しているわけではない。差別され夫が治療してもらえず若くして未亡人になった元メンバー、夫がエイズを発症し生活にも困窮している元メンバーなど、彼女らがかかえる現実はあまりにも重い。しかしそれらにただ屈するのではなく、何らかの解決方法をみつける力をもつ一人一人の女性であり、彼女たちの人生だけではなく、その周囲をも、徐々にかえていつている。静かにそして着実に変革はすすんでいる。

シャクティは、近い将来は公的にも認定された教育養成機関として、施設を整え、より多くの人材を養成できるようにする計画がすすんでいる。このようにダリット女性の意識や地位を改善するために、一步一步さらにあゆみをすすめていこうとしているいま、日本にやっつけて発してくれるメッセージに耳を傾けたい。

**黒川妙子（くろかわ・たえこ）**

インド文化研究者、大阪大学で「南インドのダリットの文化運動」について博士号を得る

# アジアウェーブ読者御招待

シャクティが初来日し、その創設者チャンドラさんが講演会を行います。またシャクティの演奏も行われます。ICLC主催のこのイベントに、アジアウェーブの読者を、先着20名さまをご招待します。ご希望の方は、下記までメールにてお申込ください。(ご氏名、住所、電話番号をおかきください。)

**申込先** iclc2001@gmail.com

**締切** 11月13日(木)

ご招待となった方には、ICLC事務局よりメールが送られます。

**イベント内容** : シスターチャンドラの講演会と民俗舞踊「ダリット女性の教育と民俗芸能」

**日時** 2008年11月17日(月) 午後6時半から8時半

**場所** 虎ノ門・海洋船舶ビル10階会議室 (地下鉄銀座線虎ノ門駅4番出口が最寄り)

(参加費は通常1500円のところをご招待。またアジアウェーブを見たと言え  
ば1200円にて入場可。)

**問い合わせ** ICLC 090-6505-1782 iclc2001@gmail.com

## シスターチャンドラの講演会、シャクティの南インド(タミル)民俗舞踊公演のおしらせ

● 「シスターチャンドラとシャクティの踊り手たち」

—タミル民俗舞踊公演と映画上映

11月11日(火) 第1回 午後3時開演 第2回 午後6時半開演

11月12日(水) 第1回 午後3時開演 第2回 午後6時半開演

於 東京青山 東京ウィメンズプラザホール

入場料 3000円

問い合わせ先 ロードプロモーション 043-293-2828

mail@roadpromotion.net

● 「ダリット女性の教育と民俗芸能」

—シスターチャンドラの講演会と民俗舞踊

11月17日(月) 午後6時半開演 於 東京虎ノ門 海洋船舶ビル10階

入場料 1500円

問い合わせ先 ICLC 090-6505-1782 iclc2001@gmail.com



エッセイ  
日本が沈む日  
はとう ゆきお

私には、この五年ほどで個人旅行の若者の様子が、一変してしまったように思えてしかたありません。今の二十代の若者からは、「好奇心」や「探究心」が感じられないのです。

人生に必要なのは知識よりも、洞察力、判断力、実行力。それらのすべてが、どこかに消えてしまったようです。

八十年代、各地の情報ノートには、「海外に出て初めて気づいた日本の姿」や、「自分の心の中を静かに見つめた文章」が、よくつづられていました。時としてそれは、長文で書かれた深い人生への洞察だったりもしました。

それが二〇〇〇年代になると、内容がどんどん墮落していきます。白いページに大きな字を書きながつていく人が増えるのです。

長い文章を書く人が減り、箇条書きばかりが目立つようになります。まるでネット上のチャットです。

しかもその内容も、「十パーツ食堂のメシ、サイコー」とか、「今日もまつたりと、ハッピーでボンなひと時でした」といった、具にもつかない落書きに墮していくのです。



朝ごはんの行商人 わんこがおむかえ

前者は、チエンマイにあった激安食堂のことです。これを書いた人は、そこでどんな食材が使われているのか、考えたこともないのでしよう。

後者は、マリファナ常習者の記述です。ハッピーというのは大麻の隠語、ボンは大麻を回し飲みすること、またそれが効いている状態のことです。

そして今、「何のために高い飛行機代を払って、海外に来ているんだろう、キミらは？」と首を傾げざるを得ない若者が増えています。こういう人たちは、ノートに筆跡を残すことすらしません。

旅行先の文化にも歴史にも興味がないのに、なぜ来たのですか、あなたは？

旅行先の基本的な情報すら、知らないで来る人がいます。そして往々にして問題を起こしたり、犯罪の被害に遭ったりしています。

今回もバンコクで、詐欺に遭って七万円をまきあげられた女の子に会いました。しかし、「それって、ガイドブックに書いてある有名な手口そのままじゃない。いまだきそんなのに引つかかる人がいるのお？」と、誰にも同情してもらえませんでした。

そもそも、ガイドブックを読まずに出発する人さえいます。もう呆れるしかないのですが、飛行機に乗って初めてガイドブックを広げる人が、よくいるのです。

さらに甚だしきは、ガイドブックを持たずに旅している人たちです。タイに三十回は行っている私でさえ、ガイドブックの切れ端は持って行きますよ。やはり地図は必要ですし、非常時

に必要な日本大使館や病院の電話番号も載っているからです。

タイにきている大学生の多くは、二週間ほどの日程で、カーオ・サーン通りとか週末市場などをうろついただけで帰って行きます。

たまに地方へ足を延ばしても、そこはどういった見所があるのか知らうともしないで、次の町へ移動して行きます。



ブーノイ族のお姉ちゃん

今回も、タイのノンカーイ市で同宿だった若者たちに、「ワット・ケーク（郊外にある有名な観光地）へ、一緒に行きませんか？」と誘ったところ、「それって、何ですか？」と聞かれ、腰が抜けそうになりました。

観光にカネを使わないのも、彼らの特徴です。ラオスのルアンパバーン市からは、日帰りツアーがたくさん出ています。

名所巡り、洞窟探検、カヤックでの川下り、少数民族の村への徒歩旅行、サイクリング、よりどりみどりでです。

しかし彼らは、そういったものに興味を示しません。ひたすら宿でゴロゴロしているか、ネットカフェで一日を過ごします。日本料理店に居座って、何時間漫画を読み漁る人もよくいます。なんのことはない、海外で「引きこもり」をしているのです。最近ではこういった人た



長い内戦と社会主義のせいで少年僧しかない



蛙が鳴くからかーえろっと 雨季にはこの橋は流されて使えない

ちのことを、「外こもり」って呼ぶらしいですね。彼らの口癖は、「それはボくらには高すぎる」というものです。伝統舞踊のショーに誘っても、コンサートに誘っても、ほとんどウンと言ふことはありません。たかだか千円ほどですのにねえ。そのくせ、酒、ネットカフェ、そして大麻にはカネを惜しまないのです。

ヤオ族のL村での出来事も、書いておきましょう。

あるとき村長の盤さんが、自宅の前に新しい小屋を建てました。「なんとかウチの村にも、外国人を呼び込みたいんです。この家をゲストハウスにして、泊まっていってほしいのです。」

するとすぐに、日本人を含む数人の外国人がやって来ました。彼らは一週間ほど滞在して、さんざん飲み食いして行きました。

帰りがけに彼らは、「今、ブーツの持ち合わせがないから、自分達の国のカネで勘弁してくれないか。町に持って行けば、それなりの金額になるから」と言っています。ジャラジャラと硬貨を置いて行きました。

人の良い村長さんは、ホクホク顔で過ぎました。「いつたい幾らくれたんだろうなあ、あの人たちは。」

やがて別の日本人がやって来ました。村長はさっそく硬貨を見せて聞きました。「ねえ、これはブーツに両替すると、いくらくらいになるんでしょうか？」

…そこにあつたのは、ペニー、ダイム、そして一円玉と五円玉。すべて合わせても、五百円にも足りない金額でした。

真実を告げられた村長は、「俺が、バカだった」とつぶやいたきり、がっかりと項垂<sup>うなだ</sup>れてしまったそうです。

ここ数年來、私は旅の空で思うのです、「ああ、国が没落していくときって、こんななんだなあ」と。



静寂の古都 ルアンパバーン



うえつ うえつ うえーん

インド・ネパール・アフガニスタン・バリなどなどからはるばるやってきた衣料品・織物・アクセサリ・楽器・CD・DVD、、、が皆様をお待ちしております



<http://www.harubaruya.com/>

180-0004 武蔵野市吉祥寺本町 1-8-3 コスモビル 2階

Phone & Fax. 0422-21-4790

渋谷アムリタ Phone & Fax. 03-3461-6563

吉祥寺別館 Phone & Fax 0422-22-2433

☆はるばる屋通信☆

インド・バリからオリジナル秋冬物衣料品  
続々入荷中です。

★軽井沢店は、11月24日まで、  
毎週土、日、月曜日営業いたします。

来年もよろしくお願ひいたします！

ペリーダンス、インド舞踊のイベントに  
商品を持って参加いたします。ご連絡ください。

ネットでのお買物もお楽しみください！

### はとうゆきお

本名、羽藤由喜夫、1955年生まれ。

1983年、初めての海外の夜を、旧ドンムアン空港の床でゴロ寝して過ごす。その後、赤痢になって、華やかな海外デビューを飾る。帰国後、伝説の旅行誌「オデッセイ」を手伝う。1984年、タイで猟銃を押し付けられ、ホールドアップ。ちょっとヤバイかなと思う。北タイ山中で、アヘンの秘密工場のある村へ迷い込む。泊まった家のあちこちに、拳銃やら機関銃やらが転がっていて、かなりヤバイと感じる。

1986年、居候していた家の主人が、奥さんを射殺し、ビルマへ逃亡。相当ヤバイ。1989年、愛媛県今治市へ移住。田舎に引っ込んででも旅がやめられないことがわかり、もう自分の人生そのものがヤバイ。1992年、バンコクでヤバイ相手と喧嘩して、キン〇マを握りつぶされそうになる。1994年、ピビ島で肋骨を三本折りながらも、素潜りを続ける。すでに人生を捨てている。1997年、バリ島で昏倒し、動けなくなる。真剣にヤバかった。2000年代、知り合いが次々と死んでいく。突然死とか、エイズとか。腐乱死体で発見された奴もいた。2008年、まだ生きている。大丈夫だあ。